

# 令和元年産水稻を振り返って

関東農政局発表の令和元年産水稻の作況指数は、西部99（平年並）、東部98（やや不良）で県全体では98の「やや不良」でした。作柄不良の原因について、生育ステージごとに、天候の面から振り返ってみたいと思います。

## 1 育苗期

浸種や出芽が不十分で、4月下旬～5月上旬の低温期間に育苗初期を迎えた苗代では、発芽不良や苗立枯病が発生するなど、苗質の低下が多く見られました。

## 2 田植え

梅雨前半の定期的な降雨で、小麦の収穫作業が遅れたため、麦あと栽培地域の田植作業も遅れぎみとなり、苗の老化が見られました。

## 3 生育初期

7月上・中旬の低温と日照不足の影響や苗質の低下もあり、活着が遅れ、初期生育も停滞しました。例年に比べ、草丈が低い・葉色が薄い・分げつが少ないといった生育となりました。

## 4 出穂期

梅雨明け（平年+3日）以降、高温になったため、「キヌヒカリ」

「彩のきずな」の出穂期は平年並でした。しかし、「彩のかがやき」では7月の日照不足で、幼穂形成が早まったと見られ、出穂期は2～5日早まりました。これは、遅植えのもののほど顕著で、葉枚数や茎数の減少を招きました。幼穂形成期の天候不順の影響で幼穂の分化がばらつき、出穂期も日照不足であったため、出穂始めから穂揃いまで日数を要しました。

## 5 成熟期

登熟期間は高温が続いたため、

成熟は平年に比べ早まりました。出穂がバラついたため、登熟も不均一で刈取適期の判定が難しく、刈遅れがみとなりました。また、9月上旬の台風15号、10月中旬の台風19号では、一部で倒伏や河川の増水による刈りわらの堆積が見られ、収穫作業の支障となりました。

## 6 収量

収量は、平年と比べてやや少ない傾向が見られます。原因として、生育初期の低温と

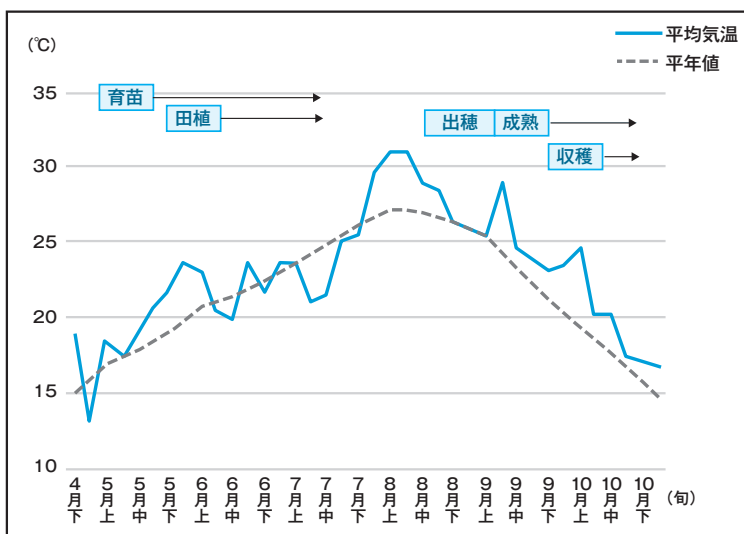


図 令和元年4月～10月の平均気温と日照時間の推移

## 7 品質

日照不足により茎数が減少したことで、幼穂形成期の前進に伴う葉枚数と穂数の減少による生育量の低下が考えられます。また、出穂後の高温による小粒化で、くず米の増加も影響しました。6月上・中旬植えでは、茎数が確保しにくい「キヌヒカリ」で平年より30～60kg/10a程度低収となりました。また、6月下旬植え以降では、出穂の早まった「彩のかがやき」や飼料用米で平年より60kg/10a以上低収となった例も見られました。

## 8 まとめ

令和元年産水稻では、育苗時期の低温・梅雨入り後の低温と日照不足・登熟期の高温など、天候不順の積み重ねが結果として生育や収量に大きく影響を与えました。気象被害を最小限に抑えるためには、健苗の育成・浅水管理による分げつ促進・中干しの徹底など、基本技術に立ち返った栽培技術の励行が重要です。

